



おじさんズ通信

2020年12月号

発行元：登別市新生町4丁目桃柿通
緑風舎

発行者：おじさんズ3号

発行の辞

世の中、降ってわいたコロナ禍が続き、心までも巣ごもり状態になりそうな今日この頃。ならば一と、1カ月1回をメドに親しき人たちに近況報告を兼ねた「おじさんズ通信」の発行を思いました。

この通信が、お手元に届いたら（こいつ、まだ生きてるぞ）のシグナルです。

もっとも、戦後の「カストリ雑誌」（古い！）よろしく、あの世への単身赴任前に編集、発行に息切れしちゃうかも。その時は、ご容赦のほどを。

おじさんズ3号

海の上を「ぶらぶら歩く」とは

～北海道幌別漁村生活誌から～

登別市立図書館ホームページのサイドメニュー「市民活動サポーターおすすめ郷土資料」コーナーに載せようと、佐藤三次郎氏が昭和13年に「アチック・ミュージアム」から出版した「北海道幌別漁村生活誌」のテキストデータ化作業に取り組んでいます。その打ち込み作業で、「へえ～」と感心させられる、あるいはアイヌの人達の話言葉で、こんな表現方法があるのか、と驚かさせられることが多々あり、独りニンマリ。

そのひとつが、13、4歳当時、親のシリカップ漁について歩いたという板久孫吉氏の話。シリカップとは元はアイヌ語で「メカジキ」のこと。佐藤氏が伯父でもある孫吉さんにインタビューし、当時の漁の様様を再現してありますが、その一部を紹介します。

「それから？」

「それから、シリカップ探して歩くんだ。一人が表を漕いでいると・・・(略)」

「なるほど、そしてシリカップ見つけるまでぶらぶら歩いてゐるんだな？」

「さうだ。一日いつばい歩つても見付けられない時や、獲りつばぐつた時は、その晩沖さ泊るんだ」

～略～

「あいさうか、そして次の日に又探すんだな？」

「うん、次の日の朝暗いうちから又探して歩くんだ」

～略～

佐藤三次郎氏は有名なアイヌ言語学者・知里真志保氏の義弟で、かつ真志保氏からアチック・ミュージアム彙集として「幌別村漁村生活誌」を書くよう励まされたいきさつがあります。

文中では、舟で漁に出る時、飲料水は徳利に入れて携行するのですが、

「～水は貧乏徳利さ入れて、エンドつていふ草あるべ、あれで栓(くち)するんだ」

「何(な)してエンドで栓するんだべ？」

「あの草で栓すれば、何日置いても水の味が變らないからよ。～略～」

とあります。エンドとはナギナタコウジュ(薙刀香需)のこと。風邪や吐き気、下痢などに薬効があり、口臭除去のうがい薬代わりにもなるといいます。

アイヌの人たちが、代々伝えてきた知恵ですね。ホームページへの掲載、年内目指して、奮闘中です！



珍客

十一月某日、雀とヒヨドリが常連の庭の餌台に、アカゲラが参上。頭の赤色は幼鳥の印とわかれ、里での食料探しか？

薫風 烈風

▶ 拙著「幌別村男爵伝」(文芸のぼりべつ第39号)を読みたいと発行元・登別市文化協会に、札幌在住の元道立文学館館長、木原直彦氏から連絡あり。在庫切れと聞いていたので、予備の残り一冊をお送りしようと、ご本人に電話したところ、「いや、届きました」との返事に一安心。

▶ しかし、事前に略歴を調べてみて驚いた。「昭和22年室蘭工業高卒」の文字に、どひゃー、高校の大先輩じゃないか！

▶ 男爵伝、読みたいという方たちのために、私の個人ウェブサイト「おじさんズ」の「ちまちま文芸帳」に掲載しました。よろしければ、ご一読を。

※カタカナ

おじさんズ

